

～週刊オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画 V～

薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. 84 《イーゴリ公》

会期／2021年3月9日(火)～5月11日(火)

(※休館日はwebでご確認ください)

連載／岸純信(オペラ研究家)

協力／渡辺真弓(オン★ステージ新聞編集長/舞踊評論家)

企画・構成／関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

現在、「週刊オン★ステージ新聞」(青林堂)にて連載中の「バレエとオペラ」関連企画として、常設展をシリーズ開催いたします。本展では、「薄井憲二バレエ・コレクション」から図版提供した記事と共に、実際の資料をご覧ください。第5弾は《イーゴリ公》(2020年9月4日号「バレエとオペラ」第13回)より。どうぞお楽しみください。

-----「バレエとオペラ」第13回 岸純信 -----

踊りと歌のバランスをボロディン《イーゴリ公》

オペラ史の授業で《カルメン》《アイダ》に次ぐ知名度を持つのがボロディンの未完の歌劇《イーゴリ公》(1890、サンクトペテルブルク)である。

理由は勿論、エキゾチックな踊りと歌の名場面を有するから。CMでも使われるぐらい人気の曲だが、日本では従来、《韃靼人の踊り》と呼ばれてきた。しかし、楽譜では《ポーロヴェツ人の踊り》と題する一場である。韃靼は蒙古系らしいが、ポーロヴェツ(またはキプチャク)はテュルク系なので、オペラの現場では楽譜の通り訳すようになっている。

ボロディンは《イーゴリ公》に20年近くかけたが動脈瘤で急逝。遺された譜面を親友リムスキー＝コルサコフとグラズノフがかき集めて補筆し、3年後に何とか初演に至った。

(中略)さて、この《ポーロヴェツ》だが、数あるオペラの中で「バレエと歌が最も激しく混ざり合う」情景である。というのも、踊りの見せ場ながら、合唱がほぼ全編を支えており、ダンスの勢いを声で後押しするからだ。ドラマでは、勝者のコプチャク汗が、囚われのイーゴリ公に陣営の威容をこれでもかと思わせるシーンなので、歌もダンスもことさらに華々しい。

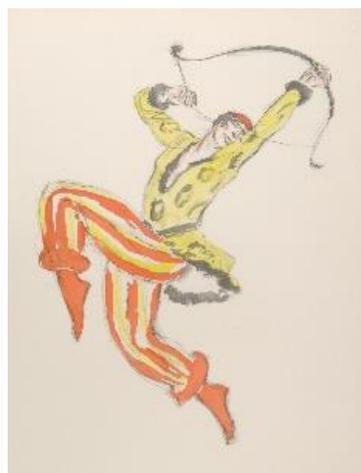
筆者が好むソースは90年ロンドン収録の映像(セルバン演出)。というのも、原・振付がかのミハイル・フォーキンであり、コーラスが歌に専念するので(余計な手拍子をダラダラ打ったりしない)、ダンサー勢の躍動感をとくと眺められるからである。オペラの舞台は踊るに狭いが、それでも、英国ロイヤル・バレエ団(※)の猛攻ぶりは凄絶のひとことに尽きる。バレエの皆様にも一度は御覧頂きたい名演である。

なお、《イーゴリ公》には他にも、短いバレエが二つある。

第2幕前半の《ポーロヴェツの娘たちの踊り》は、2013年モスクワ収録の映像(NHK-BSで放送済み)の赤々とした野趣の美学をお勧め(振付はカシヤン・ゴレイゾフスキー)。第3幕前半の《監視兵たちの合唱と踊り》(カットが通例)は、先述のロンドンの映像には含まれており、ニッキー・ウォルツがマイム的に振り付け、コミカルな一場として見せてくれている。(※【註】出演は、ステイーヴン・ジェフリース、エリザベス・マクゴリアン、ニコラ・ロバーツほか)

出展資料

- ◆ PH-D-286-02 写真／《イーゴリ公》〈ポーロヴェツ人の踊り〉／レオン・ウォイジコフスキー
- ◆ AB-31 限定書籍／《イーゴリ公》〈ポーロヴェツ人の踊り〉／ルートヴィヒ・カイナー画『バレエ・リュス』より／ドイツ／1913年



参考映像

- ◆ 《イーゴリ公》ロンドン 1990年
Prince Igor (1990) - clip 5 Polovtsian Dances
<https://youtu.be/KCPPAwdP2d8>
- ◆ 《イーゴリ公》モスクワ 2013年
Alexander Borodin - Prince Igor by Yury Lyubimov - music editor Pavel Karmanov
<https://youtu.be/ZbJsHgGa4S4>



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用